

豊庄だより



第 597 号 2020 年 1 月 14 日

福岡市早良区南庄 2-26-13
社会福祉法人林生会豊庄保育園
園長 西尾 達

新年を迎えてから 2 週間が経ちました。あつという間に時間は過ぎ去っていきませんが、この間、様々な団体において新年会が催され、私もいくつかに参加しました。会のはじめは新春の挨拶から始められることがほとんどですが、気をつけて聞いていると、「新年明けましておめでとうございます」という人が多く、以前、知人の園長先生から、この表現はおかしいのではということを知ったことを思い出しました。確かに「新年明けまして・・・」というのは、「馬から落馬した」と同様、意味が重複しています。おそらく挨拶する人はそんなこと気にもせずに話しているのしょうから、どうでもいいことかもしれませんが、やはり気になります。冒頭の挨拶言葉の後に続く話も決まりきった内容です。干支の「子(ね)」については、「子だくさん」の話題。そして次に「オリンピック、パラリンピック」と続きます。話の切り口にオリジナリティが全く感じられません。新年会に参加するたびに、同じ内容を何度も聞いていると、「他に話題はないのか」、「その挨拶、自分で考えたのか」などと、つい考えてしまいました。

さて、私の今年の読了第 1 冊目は、『ケーキの切れない非行少年たち』(新潮新書)です。著者の宮口幸治さんは立命館大学で臨床心理系の講義を担当している人ですが、もともと精神科医で、少年院で法務技官として勤務していたことがあり、その時、出会った非行少年との関わりから見てきたことが書かれていました。タイトルにある「ケーキが切れない」というのは、ある粗暴な行動が目立つ少年の面接をしたとき、丸い円を書いた紙を出し、「ここに丸いケーキがあります。3人で食べるとしたらどうやって切りますか？皆が平等になるように切ってください」という問題を出すと、「う～ん」と悩みながら、本の帯にあるように書いたのです。3等分が書けないのです。他にも、計算ができない、漢字が読めない、計画が立てられない、見通しが持てない少年たちに接し、彼らには、勉強が苦手、コミュニケーションが下手、融通がきかない、思いつきで行動する、すぐに感情的になる、相手のことを考えずに行動してしまう、などいくつか分類できる類似点があることに気づきます。「こうした子どもたちは、学校の中でどういう扱いを受けてきたか」と宮口さんは、厳しい問いかけをされています。宮口さんは学校の教職員対象の講演会で、「子どもへの支援は大きく分けて、学習面、身体面(運動面)、社会面(対人関係など)の3つになると思いますが、先生たちは、この3つの中で最終的に子どもに一番身につけてほしいために行う、最も大切な支援はなんだと思いますか」と聞くと、ほとんどの先生は、「社会面」と答えるが、「では、その社会面への支援について、今の学校では系統的にどんなことをされていますか」と続けると、先生のこれまたほとんどが「何もしていない」と答えたそうです。私もこの箇所(p126~p127)を読みながら、宮口さんからこう問われると、本の中で登場した人たちと同じ返答をしたと思いました。日々の生活指導に追われ、対人スキルの方、感情コントロール、対人マナー、問題解決力といった社会で生きていくための教育を系統的に出来ていなかったことに気付かされました。

また、非行少年の多くが、学校で勉強についていけない、授業に集中できない、漢字を覚えるのが苦手、黒板が写せない、計算が苦手といった経験を持っていること、それを克服するためには、こうした基礎的な認知機能の弱さへの支援が必要であるという指摘に、私がこれまで関わってきた生徒たちの姿が何人も浮かび、もっと早くこの本と出会えていればと思いました。なお、本の後半には、「コグトレ(認知機能強化トレーニング)」という具体的な取り組み方法も書かれています。このことはまた別の機会にお伝えしましょう。

